第二次世界大戦期のビルマ戦線に出征したローデシア・アフリカ人ライフル部隊（現ジンバブウェ）のアフリカ人兵士からの手紙-全文訳（2／2）-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学国際日本学部 公開日: 2015-08-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 溝辺, 泰雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/17400

【研究論文】

第二次世界大戦期のビルマ戦線に出征したローデシア・アフリカ人ライフル部隊（現ジンバブウェ）のアフリカ人兵士からの手紙：全文訳（2/2）[1]

Letters from Soldiers of the Rhodesian African Rifles Despatched to the Burma Theater during the World War II: A Japanese Translation（2）

溝　辺　泰　雄
MIZOBE, Yasu'o

Ⅱ（続）. アフリカ人兵士からの手紙 [2]

4. 1945 年 6 月 14 日付・第 4 書簡

ローデシア・アフリカ人ライフル部隊
東南アジア連合軍司令部
1945 年 6 月 14 日

連隊からの第四書簡

前回の手紙のなかで，私たちはとても忙しかったため，皆さんに知らせたいことを全て伝えることができないと書きました。そして，書きたいことはとてもたくさんありますが，検閲の決

（1）本稿は，2014 年 3 月に出版された『国際日本学研究』第 6 巻第 1 号所収の拙稿「第二次世界大戦期のビルマ戦線に出征したローデシア・アフリカ人ライフル部隊（現ジンバブウェ）のアフリカ人兵士からの手紙：全文訳（1/2）」（以下，前稿とする）に掲載した第 1 書簡から第 3 書簡に続く，第 4 書簡（1945 年 6 月 14 日付）及び第 5 書簡（同 9 月 12 日付）の全文訳である。第二次世界大戦期のローデシア・アフリカ人ライフル部隊（RAR）及び同部隊のインド＝ビルマ戦線派遣については，前稿を参照されたい。

（2）以下は，ジンバブウェ国立公文書館所蔵史料（NAZ. RG3/DEF4）'Letters［from the Rhodesian African Rifles South East Asia Command］to Our Families and Friends at Home'. Nos. 1–5, November 1944–September 1945' 収録の第 4 書簡（No. 4, 14 June 1945）及び「第 5 書簡（No. 5, 12 September 1945）の全文訳である。訳文中の脚注及び角括弧［ ］で挿入されている箇所は全て訳者によるものである。原文で下線が引かれている箇所は，訳文でも同様に表記した（一部の段落間に記載されている横線も同様）。また，原文において全て大文字で記載されている単語・文には傍点を付している。なお，原文にはショナ語の単語・文が英文の説明として（ ）内に付されている箇所がある。訳文ではショナ語を原文のままアルファベットで記載することとした。ショナ語の解釈も含め，本拙訳に関する読者からの指摘を歓迎する。

まりに従わないといけなかったこともお伝えしました。あの時，ある作戦が準備中で，もしそのことをお話していたら，私たちがまさにやろうとしていたことを日本人に気付かれてしまっていたでしょう。もうその作戦は完了しましたので，それについてお話することもできます。これまではよく「私たちはある場所にいます」と書いてきましたが，今は地名を書くことも許可されました。

私たちは今回お伝えする情報を提供してくれたW.O.ピーター＝ンコマにも感謝せねばなりません。

1945年の初めから，海岸や山，そしてアラカンとして知られる密林地域をたくさん歩いてきました。ビルマ[3]を知るヨーロッパ人は皆，この地は世界のなかでも最も厳しい土地であることを認めるでしょう。元日は「地下道（トンネル）」のなかで過ごしました。山の２カ所から穴をあけて通された道路で，優れた土木技術で造られます。南ローデシア［現ジンバブウェ］にはトンネルはありませんが，南アフリカ連邦［現南アフリカ共和国］には，規模はずっと小さいでしょうが，トンネルと言えるものがあるかもしれません。ただ，私たちが過ごしたトンネルが，文明国にあるような立派なトンネルと同じようなものだとは思わないで下さい。全然違います！ここのトンネルはただ山にあけた粗い穴で，鉱山の採掘抗とさほど違いはありません。ガタガタ揺れるトラックで私たちはそこを進むので，頭や肘に気をつけないといけません。私たちが通り抜ける少し前までこれらのトンネルは日本人が保有していました。そして，彼らが追い出されてしまった今は，このトンネルは山に開けられた単なる穴になってしまっています。

私たちは，マウンドー[4]とブチドンの間に位置する「トンネル」の近くに１ヶ月滞在しました。マウンドーとブチドンという街についてはいろいろ話を聞いていたので，そこに行くことを楽しみにしていました。しかし，着いてみると私たちはがっかりしてしまいました。逃げていったジャップたち[5]が街を完全に破壊してしまっていたのです。そこには壊れたレンガと廃墟しかなく，「街」と言えるものは何も残っていませんでした。私たちはこの周辺の密林地域で時間をかけて捜索活動をおこないました。狡猾なジャップたちは見つかりませんでしたが，彼らがまさにこの付近に居たことを示す痕跡は確認できました。

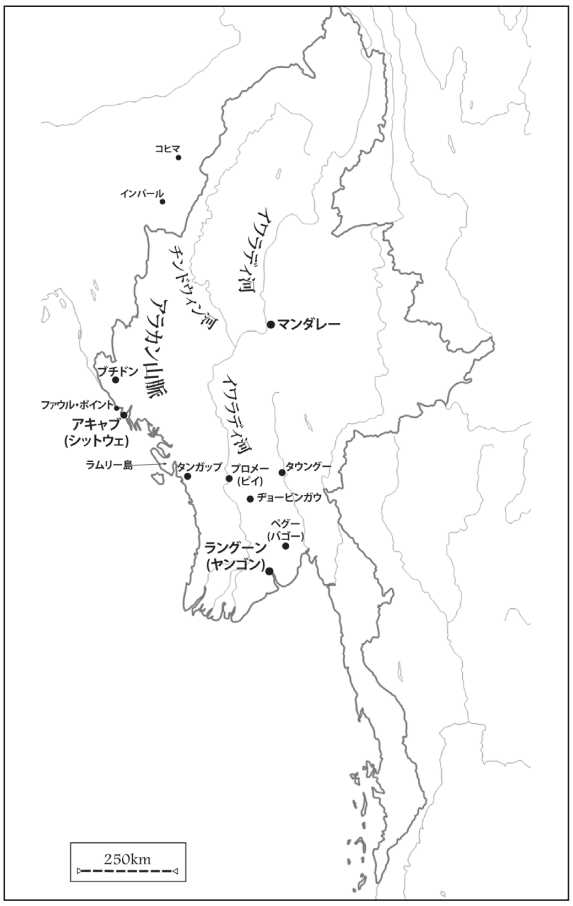
その地域からトラックに乗って海岸沿いを移動した私たちは岬の先に辿りつきました。その地域は「ファウル・ポイント」と呼ばれていました。それから私たちはカラパンジン河（KALAPANZIN RIVER）を渡りました。これは本当に大きな河で，向こう岸まで７マイル［約11.2km］以上もあり，上陸用舟艇で対岸に渡るのに１時間ほどかかりました。私たちはアキャブ島の上端に上陸し，アキャブ［現シットウェ］の街からおよそ２マイル［約3.2km］のところにある野営地まで進みました。私たちは美しい街の光景を期待していましたが―立派な建物があったことを示す痕跡はありましたが―ここでもまた私たちが見たものは堆く積もったゴミの山

（３）前稿同様，本稿においても'Burma'の訳語は当時の呼称「ビルマ」を用いる。
（４）以降，本翻訳で言及のあるビルマ（ミャンマー）の主な都市，村，河川などの位置は図１を参照のこと。
（５）原文は'the Japs'。前稿と同様，本稿においても原文が'Japanese'の場合は「日本人」もしくは「日本（の）」，'Jap'の場合は「ジャップ」と訳す。

だけでした。［連合軍の］空軍の爆弾がジャップと建物を吹き飛ばしてしまっていたのです。港では多くの日本の軍船が沈んでいるのを目にしました。注意深いジャップたちはすでにその場を去っていたので，ここでは戦闘はおこなわれませんでした。そのため短い滞在の後，私たちはアキャブを離れ再び移動を開始しました。

私たちは再び船に乗りました。今回はとても小さな船でした。そして長い移動の末にようやく「ラムリー島」として知られる場所に到着しました。私たちは海岸に野営地を設けました。もう一ヶ月ほど海辺で過ごしてきたため，海水で身体を洗うことにも慣れてきましたし，身体も丈夫になりました。日本兵がいないか常に見張っていましたが，近くの村々を巡回しても彼らの姿は見当たりませんでした。村を巡回する際，沼に囲まれていたために小さなボートを使わないといけない時もありました。

［図 1］ビルマ（ミャンマー）概略図



［出所］d-map.com（http://d-maps.com）の白地図を下図に，参考文献及び Google Maps 等を参照して筆者が作成

ある日私たちは，装備品を全て鞄にまとめ，身軽になって移動する準備を整えるように命令を受けました。その後，全てのナップサックをその場に残すように言われました。これまでの経験から，戦闘がまもなく始まるのだと思いました。野営地の近くまできた英国海軍の軍艦に私たちは乗り込みました。この立派な軍艦はあまりに荘厳なので，その見た目を地元の村々の皆さんにお伝えすることはできません。私たちが国に帰るまで待っておいてください。ヨーロッパ人の船員は私たちにとても親切で，彼らは紅茶や食糧を与えてくれました。彼らは私たちの仲間であることを実感しました。私たちの方も，彼らのために伝統的な踊りを見せたり，歌を聞かせたりしました。船員たちは私たちの踊りが気に入ったようで，私たちのことをとても親切に扱いました。この航海が終わり，彼らに別れを告げねばならなかった時，私たちはとてもさみしく感じました。彼らと別れて私たちはビルマの本土に上陸しました。しかし，船を降りても周囲は沼でしたので，固い土地に辿りつくまで小さいボートで何マイルも進まねばなりませんでした。ここに来るまで私たちはジャップたちに邪魔をされることはありませんでした。彼らはここでも私たちが来る前に逃げていたのです。

しかしまもなくすると，南に向かっていたジャップたちに追いつきそうだとの情報が届きました。そこで私たちは再び山と海の間の細い道を進みました。私たちは彼らに接近しつつあることに気付きました。私たちが進むのを邪魔しようと彼らが仕掛けた「ブービー爆弾（Booby Trap）」に出くわしはじめたからです。私たちはとてもゆっくりと慎重に歩いてそれらの「爆弾」を避けねばなりませんでした。もし急いで進もうとすると，その「罠」は私たちが先に進むのを後押しをしてくれるかもしれません。しかし，空中に打ち上げられるわけですが。これらのブービー爆弾は地面の中や他のいろんな場所に隠された爆弾のようなもので，もしそれに触れると命を落とすか少なくとも大けがをします。私たちの前を進んでいた北ローデシア［現ザンビア］出身の運転手のトラックがブービー爆弾の上を通ってしまったとき，彼はトラックごと大破し，完全に粉々になってしまいました。「PFOCHO［逃げろ］!」私たちはすぐさま身を隠しました。

日本兵たちは私たちに追跡されていることを嫌がっていました。彼らは昼間に攻めてくることはありませんでしたが，夜になると頻繁に攻撃してきました。ある夜の攻撃の際，グウェロ地区[(6)]チーフムコバのスィツィカ村（Sitsika Village）出身の RHO2165 番ジュズィ二等兵は運良く逃げることができました。ある日本兵が私たちに向けて爆弾を投げてきました。その爆弾はちょうどジュズィ二等兵がジャップに向けて発射しようとしていたライフルに当たりました。もちろんその爆弾は爆発し，ジュズィの手には小さなライフルのかけらだけが残っていました。ジュズィのライフルの残りの部分は粉々になったのですが，幸運なことに，彼は何一つ怪我をすることなかったのです！

この間，とても暑い天気が続きました。土地はひどく乾き，兵士たちもとても喉が渇いていました。ここから私たちはとても湿った地域かとても乾いた地域のいずれかに向かうことが予想されました。いずれに進むにしても大いに体力を消耗するのは明らかでした。なぜなら，私たちが背負っている軍用鞄はとても重かったからです。しかし，訓練のおかけで私たちは大変丈夫になっていたので，そう簡単には疲れたりしませんでした。それよりも，まもなくジャップたちに追いついて彼らに攻撃を加えることを思うと，どんな仕事でもやってやろうという気持ちになりました。私たち兵士の顔には汗と笑顔がありました。なぜなら私たちローデシア・アフリカ人ライフル部隊は価値ある任務を率先して果たしていると実感していたからです。

65 マイルほど［約 100km］の本当に苛酷な行軍の後，私たちは「タンルウェ・チャウン」として知られる河に辿り着き，そこで有名な西アフリカ師団（WEST AFRICA DIVISION）と合流しました[(7)]。それまで東アフリカ出身のアフリカ人と一緒にいた私たちにとって，アフリカ西海岸出身のアフリカ人と一緒に任務につくのは面白かったです。彼らは優れた集団で，体格も良く見た目も立派でした。皆英語を話すことができたので，彼らと話をするのは容易でした。私たちアフリカ人は英語の価値を実感しています。これまでいろんな地域の人たちと会ってきまし

（6）以降，本翻訳で言及のある南ローデシア（ジンバブウェ）の主な都市，村，河川などの位置は図 1 を参照のこと。

（7）当時のインド＝ビルマ戦線には，英領西アフリカ植民地（現在のナイジェリア，ガーナ，シエラレオネ，ガンビア）から「第 81（西アフリカ）師団」と「第 82（西アフリカ）師団」が派遣されていた。Page, *King's African Rifles*, p.133.

たが，彼らの多くと英語で話をすることができました。ほかにも，多くの西アフリカ出身の将校や大隊付下士官が南ローデシアにいったことがあることを知り，興味深く感じました。彼らと［南ローデシア］植民地のことについていろんな話をしました。

私たちの旅団には北ローデシア出身のアフリカ人からなる大隊とニャサランド［現マラウィ］出身のアフリカ人からなる大隊があります。日本兵の裏手に入って後ろと脇から彼らを追い込むために，タンルウェ・チャウン河を下る指令が私たちに与えられました。気持ちが高ぶってきました！ 戦いの時が近づいています！！ 私たちにはとても大きな銃が８つ付いた砲台—ちょうどソールズベリ［現ジンバブウェの首都ハラレ］に以前あった軽砲のようなものです—が１基あり，西アフリカ人の射撃手たちがこれらの大きな銃を扱っていました。

ローデシア・アフリカ人ライフル部隊の先導のもと，私たちは川を下りました。すると私たちは初めて昼間にジャップたちの姿を捉えました。ジャップたちはあらゆる手を尽くして私たちの連隊の行く手を阻もうとしていました。彼らがよく使った手段の一つが奇襲です。私たちはすぐに彼らのやり方に慣れ，奇襲を包囲して彼らを不安に陥らせました。当然，ジャップたちは私たちの作戦を嫌がっていましたので，彼らは私たちの追跡からとにかく逃げ回り，河岸で待ち構えてはそこで私たちとの銃撃戦がおこなわれました。これらの戦いにおいて，私たちの旅団からも数名の戦死者および戦傷者が出ました。戦いにおいてこのような事が起きるのは想定していました。しかしそうした犠牲が出たとしても私たちの戦いには何ら影響はありません。私たちは戦い続けます。そして何が起きようと動じることはもうありません。ジャップたちは私たちの行く手を阻もうとしていましたが，私たちは１日３マイル［約 4.8km］のペースで進んでいきました。皆さんからすると，この距離はたいしたものではないように思えるかもしれません。しかし日本兵という敵がいることに加え，私たちは山や沼に覆われた土地で戦いながら前進しているのです。ここビルマには平らな土地はほとんどありません。至るところが山と沼です。ある山を登ると，今度は沼に向かって下っていきます。沼のなかをヨロヨロと進んでいくと，ジャップたちが私たちに向けて攻撃を加えてきて，逃げていきます。そしてまた次の山を登ると，再びまた別の沼が私たちの行く手に待ちかまえているのです。

ビルマ！ Hau!! [8]

道，ですか？道などありませんよ，皆さん（baba）。トラックで，また場所によっては象をつかって，薮をかき分け道を切り拓いていくのです。そうやって「ジープ」でさえ通れない場所を進んでいくことができます。チャウン河とその周囲の沼はとても浅いのでボートを使うことが出来ません。そのため，私たちはアヒルのようにバタバタとこの土地を通り抜けていきます。食べ物についても皆さん関心があるかもしれないですね。皆さんは見たこともないような巨大な飛行機が私たちの上に飛んできてくれるので，私たちは欲しい食べ物を全て手に入れることができま

（８）‘Hau’ はショナ語で驚きを表す語。

す。（以前の手紙で，偉大なイギリス軍はどんな問題でも解決してくれるとお伝えしましたよね。）通常，毎日これらの大きな飛行機が私たちに食糧を落としてくれます。食糧を詰めた大きな包みは「パラシュート—小さい気球のようなものです—」に結び付けられているので，食糧は私たちが休憩しているところにそっと落ちてきます。もちろん，中身が壊れたりはしませんが飛行機から転がり落ちてきて，「頭に気をつけろ」と言う時もあります。私たちアフリカ人は，イギリスとアメリカのパイロットたちが私たちに気を配ってくれていることに感謝しています。もし彼らが定期的にやってきてくれないと私たちは餓死してしまうことを彼らは知っており，これまでに一度も彼らが私たちアフリカ人を落胆させたことはありません。雨の時でも—さらに厚い霧に囲まれた山の頂上に居る時でさえ—パイロットたちはやってきて，私たちの姿を見ることなく私たちのいる場所に食糧を落としてくれます。食糧を積んだ飛行機を日本人が撃ち落とそうとしてもパイロットたちは全く動じません。彼らは時々包みをジャップたちに向けて落とすことがありますが，それはいつも爆弾なのです！

インド人の担架運搬兵にも感謝しています。彼らは負傷したアフリカ兵を，これまでにお伝えしてきたような苛酷な土地の何マイルも離れた野戦病院まで運んでくれます。（前回の手紙でお伝えしたように，野戦病院からは飛行機で快適な大きな病院まで運ばれ，私たちはすぐに回復します。）そして看護兵のことも忘れてはいけません。戦闘の最前線で私たちの小さな傷に包帯を巻いている時に，彼ら自身が負傷することもあります。ウェザ（Wedza）地区マルタ（Maruta）村出身のケニス・ミリミ二等兵もそうした看護兵の一人です。ある夜，私たちは攻撃を受け，敵の銃弾が蜂のように私たちの周りを飛び交いました。しかし手榴弾が彼らの近くで爆発しても，ミニミ二等兵を初めとした看護兵たちは動じることなく私たちの怪我の手当をしてくれました。彼ら看護兵の存在なくしては，私たちは前線に留まることはできなかったでしょう。もちろん，戦地でどのようなことが起きようとも兵士たちは動じなくなっていることはお伝えしている通りです。ですから，私たちが今ひどい状況に置かれているとは思わないでください。平穏な生活をされている皆さんからすると私たちの状況は悪く聞こえるかもしれませんが，実際はさほどではありません。

話を続けましょう。その後もずっと私たちの前進は続き，深い山の藪に分け入っていきました。ある朝，尾根の先に這い上がってみると，私たちの遥か下の方にある原住民の村（a native village）に日本兵の姿を確認しました。彼らはビルマの人たちのニワトリを追いかけまわしていました。「ジャップたちを一網打尽に撃ってしまえる絶好のチャンスだ」と私たちは言いました。しかし残念なことに，私たちの銃の射程からは距離が離れすぎていて，わあわあ言っているジャップたちをただ眺めるしかありませんでした。彼らは私たちの朝食を盗みながら，まるでニワトリのような声を上げているかと思えば，ヒヒのように大きな声で話していました。

私たちは次の日の朝までに彼らに接近し，軽銃を手に取りました。私たちはその村に突撃しましたが，ジャップの兵士たちの姿はもうそこにはありませんでした。そして，ニワトリたちも消えていたのです！ はじめに私たちはたくさんの銃で攻撃を加え，その後手榴弾を投げ込みまし

たので，その村自体も痕跡を失っていました。私たちは再び彼らを追って前進を続けました。

まもなく私たちは河岸を離れ，とても高い山を越えていくことになりました。上官は私たちに，日本人たちが私たちの追跡から逃れようとしていることは明らかだと伝えました。案の定，すぐにジャップたちは大きな砲弾や迫撃砲を撃ってきました。彼らの攻撃は夜になっても続きました。迫撃砲は正確に私たちの近くに落ちてきました。攻撃を受けるなかで，銃声と爆弾の音の違いも分かるようになりました。「迫撃砲」が発射されると，最初はかすかな爆発音が聴こえ，ヒューという音が立てながら20秒ほどで「各個掩体」と呼ばれる狭い塹壕に飛び込んできて物凄い爆発がおきます。

敵の大きな銃が撃たれたときは，迫撃砲の時のように身構える余裕はありません。銃が撃たれた音が聴こえたらどんな時でも，いつその音が鳴ったかなど考えることなくすぐに地面に身を伏せなければなりません。

日本人は何度も私たちにむけて大きな銃を撃ってきました。私たちはその銃のことを「ビンゴ」と呼んでいました。なぜならその大きな砲弾が大きな音を立てて私たちの方に向かって来る時，ちょうど「ビー・ンー・ゴォー」というように聴こえたからです。心地よい音ではありません。とても不快な砲弾です。そうした砲弾は1日20発ほど撃ち込まれ，その度に私たちは身を伏せねばなりませんでした。その時は雨が降っていたので，塹壕には半分ほど水が溜まっていました。まるでトビウサギ（NIRE）のように私たちを飛んだり跳ねたりさせるジャップたちに対して本当に怒りを覚えました。

その頃ジャップたちは丘の上に穴を掘って身を隠していました。一人がやっと通れるくらいの急ごしらえの小道の近くに，掩蔽壕やフォックスホール（タコつぼ）を作っていました。彼らをそこから誘き出すことは容易ではないように思えましたが，私たちの司令官はすぐにある計画を実行しました。敵からの砲撃を受けながらも，私たちは地面を這って彼らの位置から250ヤードほど［約230m］のところまで近づきました。その後，私たちの偵察隊が敵の状況を探りに行きました。ジャップたちも私たちの近くまで偵察隊を送ってきていました。4日ほどかけて敵の中心拠点が２つのとても急な丘の頂上にあることを確認しました。彼らを背後から攻撃するために，私たちの１大隊が後からジャップたちを包囲すべく移動を始めました。しかし日本人は機関銃をとてもたくさん持っていたので，その試みはやむなく中止しました。その後まもなく，正面からジャップたちを攻撃することが決定され，ローデシア・アフリカ人ライフル部隊はその先陣となる名誉を与えられました。以下が私たちの戦いの様子です。

午前9時，15機の私たちの軍の戦闘機が上空に現れ，敵の隠れている場所を操縦士に知らせるために私たちは日本軍がいる方向へ向けて発煙弾を発射しました。その後，戦闘機はジャップたちに機関銃と爆弾を浴びせました。戦闘機による攻撃でジャップたちを混乱させている間に，私たちアフリカ兵の先陣が敵から200ヤード［約180m］以内のところまで這いながら進んでいきました。爆撃の音は凄まじく，戦闘機が爆撃を減らし，西アフリカ兵狙撃手たちがジャップの位置に向けて砲撃を開始すると，いくつもの砲弾が私たちの頭の上を通り越えて飛んでいき，そ

の音はさらに大きくなりました。およそ400発の砲弾が敵の陣地に落とされ，私たちの軍の兵士たちはさらに這いながら前進を続け，ジャップの戦列に向けて徐々に接近していきました。すると突然爆撃の音が止み，私たちの軍の最初の中隊が銃剣と「鉈（pangas）」を持ち，丘に向かって突撃を開始しました。私たちはマタベレ語の叫び声を上げて，敵の機関銃に向けて真直ぐに駆けていきました。私たちの突然の突進はジャップたちが思っていたよりも規模が大きかったようで，私たちが彼らの機関銃の射程に入ってくる前に彼らは穴から飛び出して逃げていきました。彼らの逃げ足は非常に速かったので，彼らを撃つことはできませんでした。こうして私たちは敵が陣地を構えていた1つ目の丘を奪取しました。作戦が成功し，ピータース軍曹はとても満足していました。

今度は2つ目の最も険しい丘の奪取です。この丘の頂上へ向かう唯一の道には，ジャップたちが4,5挺の機関銃を配置していました。そのうちの1挺は，丘の上から真下に，私たちが丘を登る時に通らねばならない道に向けて構えられていました。この丘を私たちが奪取することをジャップたちは何としても阻止しようとしているのは明らかでした。なぜならこの丘はこの地域における彼ら全体の安全にとっての砦であったからです。そこで，私たちの2番目の中隊が素早く走りながら1ヤード，1ヤードと少しずつ丘の上へ進んでいきました。彼らはブレン式機関銃を続けざまに撃ちながら短い距離を素早く前進していきます。木の間から私たちに向けて日本人が発砲してきます。私たちの機関銃と木の上にいる敵の狙撃手との間で大変緊迫した銃撃戦が続きました。その後，私たちは静かに身を伏せ，木の上にいる狙撃手を探しました。私たちの攻撃が功を奏し，まもなく，木に隠れていた敵の全ての狙撃手を撃ち落とすことができました。この険しい山を攻撃する際，当然ながら私たちの軍にも負傷者がでました。しかし司令官や大隊付下士官たちによる強い励ましもあって，遂に私たちはこの丘を奪取することができたのです。機関銃を構えていた最後のジャップの兵士をわずか数フィートの距離からブレン銃で撃ち殺し，私たちは日本の国旗を手に入れたのです！

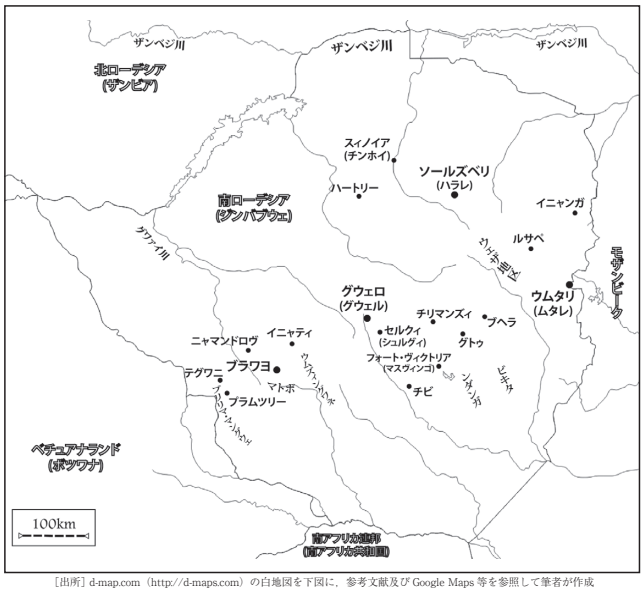
ジャップたちはこれまでと同じことをする，つまり私たちが接近するとすぐに逃げる，と分かっていたので，北ローデシア大隊の一部がジャップの陣地の裏に回り，丘の裏側から退却しようする敵の兵士を待ち構えていました。すると案の定，私たちが正面から機関銃の狙撃手を撃ち殺していくにつれて，ほとんどのジャップの兵士たちは丘の裏側の方向へ逃げはじめ，そこで待ち伏せしていた北ローデシアの兵士の奇襲に遭うことになりました。

その陣地を手に入れた私たちはその場所を離れようと考えていました。しかし，敵には別の考えがあったようで，長い時間をかけて私たちに向けて砲弾を撃ち込んできました。その後ジャップたちが反撃してくるのではないかと考えた私たちは，奇襲作戦を練るために400ヤードほど［約360m］戻った地点に小規模な偵察隊を送りました。北ローデシア出身のRHO4250番カラルカ二等兵がこの時のことを説明してくれました：

「この奇襲攻撃の時，兵士はそれぞれ1挺のライフル銃を携帯し，隊には1挺のブレン銃がありました。攻撃に備えて隊員は道に伏せ，彼らの前の位置に私も伏せていました。そこ

で30分ほど身を伏せていた時，何かカサカサする音が聴こえました。その時私は，銃を携えた何人かのジャップの兵士が地面を這っているのを目にしました。1人目のジャップが私の前を通り過ぎた時，偵察隊の他の隊員がブレン銃を射撃位置に備えました。しかし不運なことにそのブレン銃は弾が詰まってしまったため，私は自分のライフル銃を5ヤード［約4.5m］先にいたジャップの隊列に向けて撃ち，弾は先頭から2人目のジャップに命中しました。そのジャップは悲鳴を上げて持っていた機関銃を手放し，小走りで逃げました。その機関銃は私たちが確保しました。」

［図2］南ローデシア（ジンバブウェ）概略図



［出所］d-map.com（http://d-maps.com）の白地図を下図に，参考文献及びGoogle Maps等を参照して筆者が作成

このジャップたちの失敗の後，彼らは数マイル退避していきましたが，私たちは彼らから離れることなく追跡していきました。この間，ずっと雨が降っており，私たちが進む道は水と泥で覆われていました。時々，ジャップたちは立ち止まって私たちに向けて銃を撃ってきました。小規模な戦闘の後，私たちは目的地に到達しました。私たちは密林を登ってタンガップとプロメーを結ぶ道路に出ました。ようやくちゃんとした道路に出ることができて本当に嬉しかったです。

急いで退却していったジャップたちは，多くの装備品や補給品を残していきました。

アラカン作戦における私たちの任務はこれで終わりました。現在，私たちは短い休息を取っています。

2人のアフリカ人下士官が活躍しました。ウムズィングワネ地区のンダレマネ村出身のRHO248番フィリップ・モヨ軍曹はその1人です。彼が属していた小隊は，小さな丘の上にいたジャップの兵士から激しい攻撃を受けました。私たちの中隊の司令官は，小隊がそこに留まれないと判断して撤退を命じました。しかし，兵士たちが後退を試みようとする度にジャップたちは私たちに向けて銃弾を浴びせてきたため，動くと撃たれる危険がありました。

この状況を見たフィリップ・モヨ軍曹は1挺のブレン銃を手に取り，敵に完全に見える状態で立ち上がりました。そしてジャップたちに向けて銃弾を連射し，2人の敵を殺しました。するとジャップたちは攻撃を止め，私たちの小隊は無事にその場から戻ることができたのです。

活躍したもう1人の下士官はグワァイ居住区ゴムベヤ出身のRHO157番エリジャー上級曹長です。彼の小隊は機関銃と迫撃砲による攻撃にさらされていました。彼は日本軍の陣地のすぐ前で4人の仲間の兵士が負傷した声を確認しました。彼は自分に向かって撃たれる銃弾を気にする

ことなく，負傷した兵士のところへ走りました。しかし，不運にもすでに彼らは息絶えてしまっていました。

今月の出来事は以上です。これらの戦いを経た今，ローデシア・アフリカ人ライフル部隊の兵士たちは皆，とても誇りを感じています。他の部隊の兵士たちのなかでも胸を張って過ごすことが出来ています。私たちは日本人の兵士とも対等に戦っています。次に彼らと戦うときは間違いなく打ち負かせることでしょう。もちろん，私たちも何人かの同士を失い，負傷した仲間もいます。しかし，戦争ではこうしたことを避けることはできません。私たちは全く恐れていません。戦争では損失は必ず起きるものだからです。

次の手紙までしばらくお別れです。任務が最優先ですので，いつ次の手紙を書くことが出来るかわかりません。しかし，ムチェンゲティは必ず皆さんに手紙を書きます。皆さんも私たちに手紙を書くことを忘れないで下さい！

そう，「ムチェンゲティ」はローデシア・アフリカ人ライフル部隊の兵士や司令官から何通かの手紙を受け取っています。勇敢なアフリカ人兵士たちに関するワクワクするようなことが書かれていますよ。しかし，これらの手紙についてお話する前に，ローデシアにいるアフリカ人の皆さんにお尋ねしたいことがあります。皆さんはこの素晴らしい話を聞く資格が本当にあるでしょうか？ 考えてみて下さい。ビルマにいるこの勇敢な兵士たちは，何とか時間を見つけてこちらでの凄い生活について手紙を書いているにも関わらず，本国からはほとんど手紙が送られてこないことに不満を感じています。そちらには何百もの原住民教員や原住民官吏がおり，村での出来事を手紙で兵士たちに伝え，母国の今の様子を知らせることができる人がたくさんいるはずです。しかし残念なことに，毎月ふるさとの知らせを伝えてくれる手紙が届くのは両手の指で数えられるほどしかありません！ 兵士たちに手紙を送って下さる方々には，兵士たちと私から感謝申し上げます。連隊からの手紙を楽しみに読んでいると私に伝えて下さっている（そしてもっとたくさん話を聞かせてほしいとも伝えて下さっている）皆さんには，「まずは皆さんが兵士たちに手紙を書いて下さい。兵士たちのワクワクする話を期待するのはそれからです」とお伝えします。

もう一つお伝えすることがあります。母国を離れている兵士たちの妻や娘たちに敬意を払ってください！ 女性たちの悲しむべき振る舞いについて書かれた手紙がこちらにもたくさん届いています。皆さん，ローデシア・アフリカ人ライフル部隊の男たちがどれだけ勇敢であるか，もう知っていますよね。それにも関わらず，彼らが戦いに出ている間に，兵士たちの妻や家族にちょっかいを出す男がいるのです！ 兵士たちが国も戻ったらどうなるか分かっていますか。わたしのところに，ある地区から手紙が寄せられました。ある兵士の 2 人の妻が最近子どもを産んだ—一方の妻は双子を産んだようです—のですが，その父親はローデシアにいる無精者の輩というではあ

りませんか！ こんなひどい話を兵士本人に伝えることができるでしょうか。村のチーフたちは，兵士たちの家族に目を配り，兵士たちの妻や娘たちを「唆そう（nyenga）」とする男たちがいた時はすぐに原住民委員へ報告するようにお願いします。

南ローデシアの多くの地区で有名なモリス少佐は，最近の戦闘で命を失った以下の男たちの親族に向けて，お悔やみの気持ちを伝えています：

ブリリマ・マングウェ出身 RHO800 番ンドド二等兵，ニャサランド出身 2315 番ロナルド，ブヘラ出身 2416 番ティリヴァヌ，そして負傷した同日に他界した RHO880 番シロムブワナです。モリス少佐は彼らの勇敢さを讃えています。

モリス少佐は負傷した兵士に関する情報も伝えています。「これらの偉大な若者たちは急速に快方に向かっている」とのことです。

ンダンガ地区出身 1789 番チョムノルグワ軍曹，プラムツリー出身 1226 番シパニュパニュ伍長，プラムツリー出身 927 番ムチュマイェリ二等兵，プラムツリー出身 4103 番ヴォティ二等兵，イニャティ出身 1793 番マカニ伍長，ハートリー出身 1697 番スピウェ二等兵，ニャサランド出身 1153 番ラプケン二等兵（彼はモリス少佐の伝令でメッセージを伝える際に負傷しました），セルクウェ出身 1730 番ホフィスィ二等兵，スィノイア出身 796 番マキワ二等兵，グウェロ出身 2163 番グズィ二等兵，チリマンズィ出身 2094 番ムザネナム二等兵，ニャマンドロヴ出身 449 番ジェームス二等兵，マトボ出身 724 番トモ二等兵，イニャンガ出身 1690 番マテニ二等兵，スィノイア出身 1000 番マチャロンガ副伍長，ビキタ出身 1606 番ムティニマ二等兵。

上記の負傷したアフリカ人の中には，すでに回復し連隊に復帰した者もいる一方で，まだ十分に回復せず任務に戻れていない者もいます。マチャロンガとムティニマはモリス少佐付の無線通信士で，「彼らは良い仕事をしており，負傷した際も我が軍の攻撃に随行していた」とモリス少佐は語っています。

将校たちから寄せられた手紙の全てをお伝えすることができませんが，皆，敵陣を奪取する最も厳しい任務のなかでアフリカ人兵士は卓越した働きをしたと伝えています。この手紙の初めの方で書きましたが，敵の裏に回るチャンスがなかったため，兵士たちは日本人を正面から攻めて排撃しました。

少しこれも読んでください。「ローデシア・アフリカ人ライフル部隊は第 82 西アフリカ師団の第 22 旅団に編入したことを皆さんにお伝えすることが許可されました。我々はアラカン戦線の丘陵地域のタンガップで任務に着いており，これぞビルマの密林戦というべきあらゆることを経験しています。1 週間以上にも渡って昼夜を問わず雨が降り続くなか，いくつもの丘が連なる何マイルもの道のりを重い足取りで歩きます。そのなかを，勇敢なアフリカ人たちはローデシアのラバも尻込みしてしまうほどの重い荷物を背負って進まねばならないのです！ 我々は飛行機が落とす食糧に頼らざるを得ませんが，これまで一度も食糧に困ったことがありません。」これはある将校から寄せられた手紙の一部です。彼は続けて次のように書いています。「我々の大砲

が日本人に向けて発射される時，RAR［ローデシア・アフリカ人ライフル部隊］の兵士たちは，砲弾は敵陣に落ちるもので，日本兵が我が方に大砲を撃ち込むとは思っていないようでした。しかしある日，ジャップたちは我が方に銃弾と迫撃砲を撃ち込んで来ました。アフリカ人たちはこれを侮辱と感じ，ジャップたちに対し非常に怒りました。しばらくして我が軍のアフリカ人たちは銃弾や砲弾を気に留めなくなりましたが，今後も『この屈辱』のことは忘れないと言っていました（実際彼らは忘れていません）。モリス少佐の中隊からは 3 名の司令官と 35 名の兵士が犠牲になりました。この内の 2 名は銃弾と迫撃砲による犠牲者です。」ここで再び，ある将校が書いていることを紹介します。「いかなる困難があろうとも，アフリカ人兵士から一言も不満を聞くことはなかった。たとえひどい大雨（モンスーン）が降っても彼らは不満を漏らすことはなかった。彼らは常に笑顔を絶やさず，時折ふざけあっているのであった。」（私たちは，アフリカ人が「ふざけあう」のは楽しい時だけで，楽しくないときはじっと座って不満を漏らすことを知っています。）私は，ムニュキ・ジョン二等兵が溺れて亡くなったことを知り，驚いています。私はある手紙を受け取りました。その手紙にはチビ(ムパンガムリ村)出身のムニュキが泳ぎ方を習っていた時の様子が説明されています。練習中,彼はとても上手く泳いでいました。しかしある日，ムニュキが飛び込みをしていた時，飛び込んだ後水面に上がってこなくなりました。彼の友人たちがすぐに水に飛び込んで彼を捜しましたが，翌日になって彼の遺体が発見されました。おそらく大雨によって河に大量の水が流れ込んだため底の流れがいつもと変わってしまい，普段飛び込みの練習に使っていた浅く静かな流れのところも水深が深くなり，底の方が強い流れになっていたことにムニュキが気付かなかったのでしょう。カウリー大尉も長い手紙を送られています。彼も，亡くなったもしくは負傷したアフリカ人兵士の親族のみなさんに，兵士たちは傷にも勇敢に対応し何事も恐れなかったこと，そして連隊の全員が彼らの勇敢さを讃え，親族の方々へのお悔やみの気持ちを伝えてほしいと述べています。

ローデシア・アフリカ人ライフル部隊の隊員からも，彼らが参加した戦いについて書かれた手紙がたくさん寄せられています。彼らは手紙が新聞に掲載されることを望んでいます。おそらく，皆さんも新聞の紙面で彼らの手紙を読むことができると思います。

母国の皆さん，忘れないで下さい。もし兵士に手紙を書いて下されば，私はここビルマで喜んで受け取ります。ソールズベリ私書箱 368 番アフリカ人担当局か，もし皆さんがブラワヨの近くに住まれている場合は，ブラワヨ私書箱 518 番アフリカ人担当局に送って下されば，兵士たちに手紙を届けます。

また私に皆さんの村で起きていることを教えて下さい。新しく産まれた赤ん坊のことや，亡くなった人，結婚した人など，皆さんの村で起きた出来事を教えて下さい。皆さんの地区出身の兵士たちはこれらの話を知りたがっています。ニャサランドや北ローデシアのチーフたちは連隊の兵士たちに手紙を送ってくれています。皆さんも私たちの連隊のためにできるはずです！ 収穫

祭を前に，皆さんにはいろんな話題が集まっているはずです。そうした話題を皆さんの近くの宣伝係に頼んで植民地軍本部へ送ってくだされば，私から兵士たちにお伝えしますので。

ムチェンゲティ

5. 1945 年 9 月 12 日付・第 5 書簡

占領日　ローデシア・アフリカ人ライフル部隊
東南アジア連合軍司令部
1945 年 9 月 12 日

第五書簡
母国の家族と友人たちへ

前回の手紙で，出来る限り早く手紙を書くことを約束しました。たった今，検閲官より，アラカン丘陵での戦いの後に起きたことを皆さんに伝えてよいとの許可が出ました。戦いの後の私たちの任務はさほどワクワクするものではありませんでした。今たくさんの任務に取りかかっていることもあり，それらの多くを忘れてしまいました。今の任務は皆さんにとっても面白いと思いますので，ソールズベリの「ムチェンゲティ」にお願いして皆さんに伝えてもらおうと思います。私たちからの全ての手紙を植民地の全ての地区に彼が届けていると聞いていますので。

戦いを終えた 5 月に私たちが短い休みを取ったことを皆さんは覚えているでしょう。モンスーン—雨季のことです—がちょうど始まった頃で，アフリカでは見たことのないような激しい暴風雨が毎日のように起きていました。皆さんの地元では大体［年間］31 か 32 インチ［約 800mm］の降水量ですが，こちらでは 200 インチ［5,000mm］以上と言えば分かってもらえるでしょうか。当然ながら，道はあってもすぐに消えてしまいますし，丘の斜面などただの川のように見えるほどで，地面という地面はなにも見えなくなってあたり一面が急な水の流れに覆われてしまうのです。そして平地では，ああ，もう座ることができません。濡れているのです。しかし立っていても濡れてしまいます。やれることと言えば，脚をつけた小屋のようなものを作るか，木の枝にハンモックのようなものを吊してその中に乗るかぐらいです。人が薮から落ちてきたり，小屋が壊れて落ちるのを見るのはとても面白いです。大笑いになります。しかし時々私たちは何がそんなに面白いのか疑問に思うこともあります。しかし私たちは皆，ここで楽しい家族になっています。

私たちはタンガップからそれほど遠くない丘陵地の端に滞在しています。ここはタンガップ河岸の小さな港街で，この河は沼地を通り抜けてタンガップから 2,3 マイルほどのところにある海に注いでいます。私たちの補給品は全て，ラムリーと呼ばれる場所からこの河を遡って運ばれてきました。私たちはラムリーを 1945 年 3 月に離れています。再び自分たちの装備鞄を見ること

ができてとても嬉しかったです。私たちの古い軍服はボロボロになっていたので，新しい服やブーツが支給されました。密林では何でも背中から裂けてしまい，私たちの隊員のなかには数週間何も着るものが無かった者もいました。

今は夜に火を焚くこともできますし，ランプを灯しても蜂のように行ったり来たりする銃弾の音を聞くこともなく，とてもほっとしています。もう夜に歌ったり踊ったりすることもできますし，新鮮な食糧も十分に支給されています。オーストラリアからビルマに届けられた肉もあります。もちろん，ソルガムビールも作りました。それも美味しかったのですが，ローデシアで飲んでいたものほどは良い味ではありませんでした。周りで女性たちが踊っている中で，友だちと一緒に美味しいこってりとしたビールが飲みたいです。とはいえ，私たちはここで怠けているわけではありません！

この時はまだ戦争は終わっていませんでした。再びジャップたちに遭遇する日に備えて，私たちは集中訓練を行なっていました。この話を続ける前に，グトゥ地区出身のRHO2100番ジョナ・ムトザ＝チピカ二等兵が非常に勤勉に任務を遂行していることを皆さんにお伝えしておきたいと思います。任務に着いている時，「一所懸命働けば，命を守れる」と彼はいつも言っています。私たちは彼に，なぜいつもこの言葉をつぶやきながら，穴を掘る時は必要よりもずっと深く掘るのか尋ねました。彼は「ううん」と間を置いた後，「こういうわけなんだ」と話を続けました：

「ある日私はある中隊で任務についていました。その中隊は，ジャップたちを丘陵地域から追いやろうとしていました。その中隊の司令官は，隊員に深い塹壕を掘るように命じました。私は，RHO2071番マカヴァ二等兵とRHO1156番ニャクク二等兵の近くにいました。私たち3人はとても疲れていたので，安全で深い塹壕を掘らずに，ほんの浅い穴を掘っただけで互いに『もう撃たれても構わないや』と言っていました。ちょうど私たちが掘るのを止めた時，ビィィーィンゴォーと日本の砲弾が飛び込んできました。1つの砲弾は私たちの浅い塹壕からたった10歩ほどのところに落ちました。私たちは皆，とても疲れていましたが，その砲弾と同じくらいの速さで自分たちが掘った塹壕に身を潜めました。この時，なんであと3フィート［約90cm］深く掘っていなかったのだろうとどれほど後悔したことでしょう。さらに1発の砲弾が私たちの塹壕のすぐ近くに落ち，その破片で私のズボンは焼けてしまいました。他の破片はニャククの脚に当たり，さらにマカヴァはシャツに火がついてしまいました。こういうわけで，今は塹壕を掘れと命じられるとしっかりとした深い塹壕を掘るようにしているのです。なぜなら，その後私は2日間座ったり横になることができませんでしたし，ニャククは腹這いでしか寝られず，マカヴァはひどい火傷でずっと立っているしかできなかったのです！ 私たちがなんとかして座ったり横になろうとするのを見て，みんな大笑いしていましたが，私たち3人にとっては面白くもなんともありません。だから私ジョナ・チピカは塹壕を掘るように指示されると，とにかく掘って掘りまくります。そして『一所懸命に働けば，命を守れる』と言うのです。」

それにしても，これはとても面白い話です。彼ら3人は銃弾が当たってもいいと言っていたに

も関わらず，次の瞬間には泥が溜まった浅い塹壕に尻を見せた状態で必死に身を隠そうとしていたのですから。また，彼らがなんとかして楽な姿勢を取ろうとしてそれができない様子を見るのも可笑しかったです。彼らはいつも一緒にいて，1人は立って，1人は横向きに座り，もう1人は木に身体を寄りかけているのですから。

フェイヤー大尉（Captain Phayre）は，私たちが最初の何度かの戦闘で感じたことについて，皆さんが興味をもっているかもしれないと言っています。最初の数分を除いて，このことを説明するのは難しいです。「最初の数分は」とブランタイア［現マラウィ南部の都市］出身のRHO1077番ジェームズ・オジェスィ＝カチングウェ軍曹は話します。「私に関する限り，密集体形を作りました！ ジャップたちは怖い小さなネズミのように見え，彼らはヤギのようにわめいていました。しかし戦いが進むにつれて私は落ち着きを取り戻しました。なぜなら，ジャップたちは敵と真正面から向き合うことができず，狡いやり方に頼っていたからです。私たちは彼らのだまし方を把握し，打ち負かすことができました。私たちはとても野蛮な土地にいますが，いつも牧師さんが共にいることを皆さんには知っておいてほしいです。教会に所属している私たちは彼に救われています。」

私たちが経験したことの全てを母国の皆さんにお話するには，分厚い本を出版する必要があるでしょう。ですので，手紙を先に進めたいと思います。タンガップに駐留していた時，私たちは移動することを命じられました。その時，私たちは大勢のジャップたちがビルマ中央部のペグー山系で足止めを喰らっていることを知りました。そこで私たちは出発しましたが，目的地に着くまでとても厳しい行程が待ち構えていました。長い距離をトラックで移動しましたが，道が非常に悪かったので，私たちはトラックを押すために何度も降りたり乗ったりを繰り返しました。その度になんだか自分たちがバッタのように見えて皆笑っていました。そういうことがあまりに続いたので，私たちは運転手にもう一度教習所に行くべきだと言ったりしていました。そんな感じで，怒ったり笑ったり，そうです皆さん，本当にたくさん笑っていたのですよ。

以下は，ウムタリのズィムニャ居住区マニェンガワナ村出身のRHO2179番エリアス・ムタムバネングウェの話です。

「ペグー山系での作戦に参加するとの話を聞いて，私たちは巨大なトラックに乗り込み山岳地帯へ向けて出発しました。初日の夕方までに，私たちは丘陵地帯の頂上までやってきました。低地の暑さに慣れてしまっていたので，そこはとても寒く感じました。そのため，私たちにラム酒が少し配給されました。素晴らしい！ 私たちは『メラクリン［メパクリン］』と呼ばれる恐ろしい黄色い錠剤を毎日飲んでいたので，ここで熱に悩まされることはありませんでした。これを飲むと肌が黄色くなるといわれ，実際ヨーロッパ人はそうなっていたのですが，アフリカ人には関係ありませんでした。そのおかしな錠剤を飲んで，私たちの肌はすごく黒くなってしまいました。家族が見たら何て言うことでしょう。

次の日，私たちは再び車列を組みました。今回は『ジープ』を使いました。ジープは他の車が走れない場所も進むことが出来ます。5分ごとに降りたり掘ったりとやることなく，安

定して進んで行くことが出来たので本当にホッとしました。その夜，私たちは草と竹を使って小さな小屋を作りました。すると雨が降ってきました。その雨は一晩中降り続けましたが，次の朝には止んだので再び移動を始めました。その日はとても濃い霧のなかを歩くことになりました。道は泥だらけで滑りやすく，気腫疽（Quarter Evil）に罹った牛のように進んでいきました。私たちは1日18マイルほど［約30km］進むこともありましたが，平均して1日8から9マイルほど[約13~14km]進みました。どれだけ進めるかは，道や薮の状態に加え，当然，雨の降り方にも左右されました。何度も丘を登っては下り，この行軍には終わりがないようにさえ思えました。どこに行っても見えるのは霧と雨で，人里すら見えません。足元は常に泥です。もちろん背中には荷物があります。鞄やライフル，銃弾などを背負って数マイルも歩くと，1トンほどの重さに感じます。時々明るく歌いながら行進をしていきますが，気付けば暗い曲を歌っていました。その歌と重い軍靴の音が山々の間に響いていました。

4日目には標高3,500フィート［約1,000m］以上の『タンガップ山道』を越え，その後は下り坂になりました。私たちは以前戦闘があった場所の近くを通りすぎました。日本兵の遺骨があるのが見えました。イギリス兵によって追い出されるまでジャップの兵士たちが住んでいた小屋の周りには，棄てられたトラックや銃，迫撃砲が散らばっていました。またある場所では，私たちの軍のある兵士がトラに遭遇しました。そのトラがとにかく大きな声で吠えたので，その兵士はトラに引っ掻かれたことに気付かないほどでした。

7日目，私たちは山岳地域を越えて，イラワディ河に着き，ボードでこの河を渡りました。この河はとても大きく，おそらくザンベジ川[(9)]より大きいのではないでしょうか，船が航行できるほどでした。ビルマにはこのようなとても大きな河がたくさんあります。ここから私たちは再びトラックに乗って移動しました。ラングーン［現ヤンゴン］へ向かう間，道の状態は結構良く，道中はたくさんの村や人々を目にしました。

こうして私たちの行軍は終わりました。この後に起きたことはまた今度お話します。」

プラムツリーのエムパンデニ・ミッション出身のピーターは次のように書いています。「エリアス二等兵が書いている通り，私たちは何度も行軍を経験しました。実際，私たちはずっと笑っていましたが，移動の多くは辛く，怖いものでした。道はとても滑りやすく，谷に向かって傾斜していました。トラックは道中ずっと前後左右に揺れ，谷がずっと遠くの下に見えるので，私は怖くて下を見ることが出来ませんでした。私はただ目を閉じて，ひたすら神に祈りを捧げていました。エリアス二等兵が書いていたトラの話についても補足できます。夕方川に近づいた時，私たちは川の近くで痛みに叫ぶ声を聞きました。私たちは急いでその場所に走っていくと，フォート・ジョンストン出身のRHO988番アンダーソン二等兵が水を汲んでいる姿を目にしました。他に数名の兵士が彼からさほど遠くないところにいました。彼が少し振り返った時，暗闇に大きな物陰を感じました。彼は仲間がいるところに戻り，自分が目にしたことを伝えて，後ろからやっ

（9）北ローデシア（現ザンビア）北部にある水源から南ローデシア（現ジンバブウェ）の北部境界線に沿って東方へ向かい，モザンビークを経てインド洋に注ぐ，アフリカ大陸で4番目に長い川。

てくるものは誰であろうが攻撃してほしいと頼みました。しかしそれはジャップではありませんでした。というのは，アンダーソン二等兵がその物陰から顔を離した時，彼は太腿を掴まれたように感じました。その時トラに捉えられたことに気付いたのです。彼が手に持ったライフル銃をトラに向かって振り落とすと，トラは飛び上がって再び藪の中に逃げていきました。アンダーソン軍曹はすぐに治療を受け，九死に一生を得たのです。」

テグワニ出身のRHO811番パウロス軍曹は，次のように書いています。「行軍の際，私は鞄と装備品をとても重く感じていました。地元に居た時，赤ん坊を背負った妻が桑で畑を耕すことに文句を言っていたのを叱ったことを思い出し，この背中の荷物と同じくらい自分のことが嫌いになりました。村に帰ったら，私は赤ん坊をいつでもどこにでも背負っていくことを約束します。」

手紙を続けましょう。私たちがイワラディ河に着く頃には，山岳地帯からかなり離れたところまで進んできていました。河岸に沿って一面に水田があり，ジャップたちが消え去った今，数百の村人がイネを植えていました。ビルマ人たちを守るために多数の兵士をその地域に残し，私たちはペグー山系との境界地域への行軍を続けました。私たちの目的地はラングーンから120マイルほど［約200km］のところにあるヂョービンガウ村でした。ペグー山系はビルマ中央部へとつながる丘陵地帯で，そこでの私たちの任務は，そこに隠れているジャップたちを追い出し，丘の反対側で銃を持って待ち構えているインド人とイギリス人からなる部隊の方へと向かわせることでした。

私たちは何度も偵察活動を行い，頻繁にジャップたちの部隊と遭遇しました。彼らはなんとかして私たちの包囲から逃れる道を探そうとしていました。私たちは，彼らが穴を掘って食べられる根菜類を探していたり，竹の新芽を食べようとしている姿を目撃しました。イニャンガのチーフ・チウォビュ，フェレムバ村のRHO2417番ジェームズ・マゾンデがこの時のことを次のように話しています：

「ある日私たちはとても鬱蒼とした密林の中を偵察し，ジャップの部隊を探していました。私たちはグルカ兵[10]の遺体が目の前に横たわっているのを見つけました。そして1挺のきれいなライフル銃が木に立て掛かっていました。私たちが注意深く見ていると，1人の日本兵が少し先にいるのが見えました。彼はそのライフル銃のところまで辿り着くことが出来ず，残念なことに，突然振り返って私たちに気付き，逃げていきました。このような濃い密林のなかでは，一歩でも動けば十分に身を隠せてしまうのです。

そこで，私たちはそのジャップを追跡しようと考え，静かに這って前進しました。彼の足跡を辿っていくと，遂に私たちは突然ジャップの陣地に行き当たりました。ジャップたちは私たちの内の1人を見つけ，銃を撃ちました。私たちは身を隠し，来た道を戻って発見した内容を報告しました。私たちの中隊の司令官であるミルス大尉は，翌朝私たちを率いて日本兵がいた塹壕のところへ向かいました。私たちが彼らに忍び寄っていくと，ジャップたちは銃を撃ってきました。私たちは地面に伏せたまま彼らに向けて撃ち返しました。朝の9時から正午まで私たちは彼らに

（10）イギリス領インド軍に所属したネパールの山岳民族出身の兵士。

向けて銃撃し，私たちの緊張感もほとんど消えてしまっていました。4,5 人のジャップたちを殺したのを確認すると，突然彼らは藪の中に走り去って行きました。私たちは彼らの陣地へ前進していくと，彼らはほとんどの荷物を残して急いで逃げていきました。私たちの側は 5 名の負傷者が出たものの，命を落とした者はいませんでした . . .」

さて，皆さんは多数の日本兵が丘陵地帯から東に向けて逃げ，彼らの多くが殺されたり捕まったりしたことをそちらの新聞で読まれているかもしれません。それが起きていた時—7 月半ばのことでしたが—，私たちもこの作戦に参加していたのです。今はもうこの任務も終了し，快適に休むことが出来ています。

ヂョービンガウはたくさんのビルマ人が暮らす大きな村です。私たち兵士は彼らととても仲良くなりました。ウムタリのズィムニャ居住区出身の RHO2179 番エリアス・ムタムバネングウェは次のように書いています。「人々はローデシアにいるインド人のような感じですが，言葉はヒンディー語とはかなり違います。私たちローデシア・アフリカ人ライフル部隊の隊員の多くは，いくつかの単語を覚えようとしましたが，ほとんどできませんでした。そのため，私たちは彼らと身振り手振りで会話をしました。兵士たちがビルマの女性の顔の前で指を 3 本立て，雌鶏のようにクワックワッと鳴いてみせている様子は笑えました。彼らは卵を 3 つ買いたかったのです。もっと可笑しかったのは，私たちがビールを買おうとしていた時です。私たちが男性の前でよろよろと歩くと，ビルマの男性はうなずいたので，私たちは笑って椅子に座り，大きくて冷めたいビールが出されるのを待っていました。しかし，驚いたことに彼は水を出してきたのです！ 仕方が無いので，私たちはもう一度今の動作を一から始めると，ビルマの人たちは驚いた様子で私たちを見つめていました。

私たちはビルマ人の文字も読みとろうとしましたが，こちらもやはり無理でした。私たちはビルマ文字が上からなのか横からなのかどこから始まっているのかさえ分かりませんでした。

ビルマ人について最も注目すべきことが 1 つあります。彼らはとにかくゆっくりと仕事をするのです。しかし彼らは私たちアフリカ人よりもずっと頭を使っています。彼らは長い間座っていながらやるべき仕事を考えています。そしてその仕事をあっと言う間にきちんと片付けます。彼らはとても良い家具を作りますが，田畑を耕すための道具はとても粗雑です。それから，彼らが作る機織り機やトウモロコシやコメを挽くための自家製の機械は，私たちの地元でも真似する価値があると思います。

私たちはコメの収穫が見たいです。これまで私たちは苗床にあるコメしか見たことがありません。苗床から苗を水田に移し替え，水田を整え，水牛を使って沼地のような田んぼを耕す様子はこれまで見てきました。近いうちにどうやって彼らがコメを収穫するのかを見てみたいです。

ビルマ人は商売も上手です。彼らは商売で生計を立てていて，コメ，タケノコ，ビール，ロブスター，トカゲ，小さいヘビ，木の実など，持っているものは何でも売り物にしています。しかし，牛肉は買うことができません。ここでは牛は神聖な生き物とされているのです。

ここの人たちは自分たちの宗教のことを『仏教』と呼んでいて，至る所に『パゴダ』と呼ばれ

る寺院があります。彼らにとっての『キリスト』は仏陀です。ここの神父は皆黄色い式服を着ていて，私たちの地元のカトリック教会と同じように，少年たちがお祈りの際に手伝っています。

ビルマには変わった慣習があります。女性はいつも家の中にいます。ただ，これが戦時中の警戒のためなのか，それとも長く続く慣習なのかどうかは分かりません。ここの人たちは木の実で出来たベテルを噛み，赤い唾を吐き捨てます。ビルマにはヨーロッパ人はほとんどいませんが，ビルマ人はアフリカ人よりもずっと上手く物事をやりくりしています。

私たちはビルマのいろんなことを見てきました。多くの役に立つものを学びました。この国について好きな部分もあり，本当に嫌なこともありました。一部に私たちより文明の段階が低いと思われる者もいますが，ビルマ人は明らかに私たちアフリカ人よりも文明化が進んでいます。とは言っても，私はビルマ人よりもアフリカ人でありたいと思います。」

プラムツリーのギリディ村出身 RHO4291 番ラムー二等兵は，先日あるビルマ人の友人の家に訪れました。彼は次のように書いています。「その家に着いたとき，友人の妻が良い匂いのする料理を作っていました。料理ができたので，私はテーブルに呼ばれ，食べるように勧められました。私はビルマ人が食べているものを知っていたので，ほんの少ししか口に入れませんでした。しかし，口に入れてみるととても美味しかったので，どんどん食べていきました。食べ終わった後，そのビルマ人—彼は少し英語が話せました—に私が食べたものを尋ねました。すると彼は小さな骨を指さして，それがカエルと小さなヘビだったことを私に教えました。私は叫びました。『何を食べてしまったんだ！ 気分が悪いし，身体が震えるよ。』その後，夜寝る時にこのまま永遠に眠りについてしまうかもしれないと恐れていましたが，私はまだ生きています。Hau!! 」

ビルマ人が私たちアフリカ人を最初に見たとき，彼ら—特に女性と子供—は私たちのことを怖がっていることに気付きました。後で聞かされたのですが，ビルマ人は，私たちアフリカ人が人食いで，女性と小さな子供を食べたがっていると思っていたそうです。しかしこれは日本兵がわざと嘘を教えていたということではなく，彼ら自身も本当に私たちが人間の肉を食べると思っていたのです。私たちが全ての日本人の遺体や捕虜を食べていると教えられていたと日本兵の捕虜たちから聞きました。

私たちはついこの間，日本兵が中国を侵略する映画を見ました。とてもハラハラする映画でした。それからニャサランドとタンガニーカ，ケニアの写真を見ました。さすがにホームシックになってしまいました.....

私たちはキャンプで「カラモジャ」をするのがとても好きです。「D」中隊が一番強いです。他にもビルマの若者たちとサッカーをしています。彼らはとても素早くプレーをするので，私たちがもう勝ちそうという時でも最後まで気を抜くことが出来ません。もちろん，試合の後の休憩時間が一番楽しいです。たくさんの卵やバナナ，ニワトリが安く手に入ります。スポーツに加え，豪華な食事と休みを十分に取った私たちは，ジャップたちとのさらなる戦いに参加するとの話を聞き，嬉しく思いました。

8 月 10 日に私たちはトラックに乗ってラングーンへ向けて移動を始めました。しかし残念な

ことに，私たちはラングーンの街に入ることはなく，その郊外の手前で迂回することになりました。隊員のなかには幸運にも任務でラングーンに入ったことのある者もいて，彼によるとその街はソールズベリやブラワヨよりもずっと大きいが，私たちのイギリス空軍による空爆で鉄道の操車場や工場などに大きな損害が出ているとのことでした。

2 日目，私たちはペグーの街を通り抜け，3 日目にタウングーに着きました。ビルマから逃げようとしていた数千のジャップたちが私たちの軍隊によって殺されたのはここの近くの場所です。今はこの地域の道沿いにずっとイギリス人とインド人の兵士の姿が見えます。彼らはちょうどジャップたちを放逐し終えたばかりで，しばしの休憩に入っていました。多くのジャップたちは別の山岳地域に逃げ，彼らはシャム［タイ］に入国しようとしています。彼らを追跡し，できるかぎり多くのジャップたちをやっつけることが私たちの任務です。

そして 8 月 15 日，私たちはさらに離れたところにある丘陵地帯を登りました。私たちがイギリス人部隊に合流し，彼らの追跡任務を引き継ごうとしていたとき，「戦争は終わった」との無線連絡が入ったと告げられました。あっけない任務の終わりに少しがっかりしましたが，本当に嬉しかったです。このときの気持ちをルサベ出身の RHO51 番タズウィリンガは次のように書いています。「何千マイルも離れたところにいる皆さんは私たちの喜びを知ることはできないでしょう。しかし今日，私たちは幸せです。私たちをローデシアの大地から遠く離してきた戦争が終わったのです。手紙で私たちの幸運を祈って下さっていた皆さんに感謝します。私たちも皆さんの『軍資金（the War Fund）』への協力に感謝します。このおかげで私たちは多くの安心を受け取りました。ここでは戦争が全てを破壊してしまいました。私たちは弱い人々の悲しい苦しみを目にしてきました。こうしたことを見た私たちは，決してこの悲惨な事実を忘れません。私たちは強国イギリスによってしっかり守られた国に生きている幸運をこの先ずっと実感していくことでしょう。たとえ再び戦争がイギリスを脅かしたとしても，今回の戦いを経験した私たちは，最初に自ら進んで連隊に参加することでしょう。」

イニャティ出身 RHO253 番ガムーは次のように書いています。「戦争は終わりました。私たちはまだたくさんここでやることがありますが，喜んでやるでしょう。再び故郷の皆さんと会える日が近づいてきているのですから。もう敵に向けて銃を撃たないでいいなんて夢のようです。仲間のなかには，本当にビルマでの戦いが終わったのか将校に尋ねた者もいました。多くの隊員は塹壕を掘っていた時にこの知らせを聞き，大きな叫び声を上げました。そして彼らは持っていた鶴嘴やショベルを放り投げ，空に向かって飛び上がって荒々しい戦いの踊りを始めました。」

スティーブン・マチャド＝バンダからも賛辞が寄せられています。皆さんのなかで，特に英国南アフリカ警察（B.S.A.Police）の隊員の方々は，BSAP から志願してローデシア・アフリカ人ライフル部隊に入隊した彼のことをよく知っていると思います。以下が彼の言葉です：

> 「私は勇敢な男たちが集まったこの大隊に参加したことを誇りに感じています。彼らはこの深い，緑の密林で象のように戦いました。私たちは立派な銃で乱暴に銃撃してくる敵にも遭遇しましたが，それでも私たちが戦いから逃げることはありませんでした。私たちは敵が

敗北するまで戦い続けました。勇敢さと神（the Great Spirit）のおかげで，私たちの損失は大きなものにはなりませんでした。この連隊が生まれたときから，私はその存在を知っていました。結成以来，私はRARの隊員に知る限りのことを教えてきました。しかし，戦いに熟練した私でさえ，私自身とこの連隊の将校たちの指導がこれほど見事な結果を残すことになるとは予想していませんでした。そして今日，私たちは一緒に笑っています。私たちは共に命を賭けて戦ってきました。すべては私たちの土地を私たちがこの地で目にしてきた恐ろしい出来事から守るためにです。そして戦争は終わり，戦争が人々と大地に引き起こしてきたことを目撃した私たちは，特に私たちの戦いの祖先たちのことを思って，慎ましく『アフリカに神の恵みを（SHE KOMBORERA AFRIKA）』と言うのです。母国の皆さんもこの言葉を唱って下さい。私たちはこの言葉に思いを巡らせ，この荒れ果てた土地と . . . ローデシア・アフリア人ライフル部隊の兵士たちの墓を見ながら，この言葉を唱います。」

今や世界が輝いて見えます。モンスーンの季節も終わりました。まぶしい太陽が黒い群衆を照らして輝いています。明るい景色です。太陽は兵士たちに希望を与えてくれます。ローズ牧師による感謝祭の礼拝式から心のこもった大きな歌声が聴こえてきます。

最後に，北ローデシアとニャサランドのチーフたちの訪問についてお話しておきたいと思います。RHO1277番マサイアス・チャシンダ軍曹がここにいる私たちの多くを代表して次のように話しています。「私たちはチーフたちのご訪問頂く名誉を賜りました。チーフたちは洗練された戦闘服を私たちと同じようにお召しになり，大変立派で誇り高く見えました。チーフたちは帰還する兵士たちに向けて，遠征中のニャサランドと北ローデシアの様子をお話されました。私たち南ローデシア出身の兵士たちはそれを興味深く拝聴しましたが，私たちのチーフが一緒に来られなかったことに，私たちは無視されているのではないと感じてがっかりし，悲しい思いをしました。」

これ以上お話することはありません。これまでに書いてきたことで，私たちがしたこと，感じてきたことが皆さんに十分伝わっていることを望んでいます。また後ほど手紙をお送りしますので，この手紙の内容をぜひ南ローデシアの皆さんに広めて下さい。帰国するまで，皆さんのニューズレターを読むことを楽しみにしていますので，どんどん送ってください。そして手紙ももっと送って下さい。

さようなら，さようなら。お元気で（Salani bwino）。

ムチェンゲティ

参考文献

【一次史料】

National Archives of Zimbabwe（NAZ）. RG3/DEF4. 'Letters［from the Rhodesian African Rifles South East Asia Command］to Our Families and Friends at Home'. Nos. 1 – 5, November 1944 – September 1945.

【事典・書籍等】

Page, Malcom.（2011）*King's African Rifles: A Story*. Barnsley: Pen&Sword Military.

Rubert, Steven C. and R. Kent Rasmussen.（2001）*Historical Dictionary of Zimbabwe*. 3rd edition. Lanhan, Maryland, and London: The Scarecrow Press.

東亜研究所 編（1942）『ビルマ地名要覧』岩波書店